

親鸞は父母の孝養のためとて、一返にても念仏もうしたること、いまだそうらわず。そのゆえは、一切の有情は、みなもって世々生々の父母兄弟なり。いずれもいずれも、この順次生に仏になりて、たすけそうろうべきなり。わがちからにてはげむ善にてもそうらわばこそ、念仏を回向して、父母をもたすけそうらわめ。ただ自力をすてて、いそぎ浄土のさとりをひらきなば、六道四生のあいだ、いずれの業苦にしずめりとも、神通方便をもって、まず有縁を度すべきなりと云々

第5章

「一切の有情は、
みなもって世々生々の父母兄弟なり」

第5組 天正寺住職

嶋地 正孝

Text by Shimachi Shoukou

第五章で聖人は「親鸞は父母の孝養のためとて、一返にても念仏申したること、いまだそうらわず」と父母の追善供養のための念仏を否定します。しかし、聖人も佐貫での「三部経」読誦をしたように父母の孝養のために念仏したことがあります。この章は「名号の他には、何事の不足にて、必ず経を読まんとするやと、思いかえし」た。そこに念仏として届いている本願の世界観が語られているのだと思います。

「わがちからにてはげむ善にてもそうらわばこそ、念仏を回向して、父母をもたすけそうらわめ」と言われます。聖人の生きた時代は地震、大火、飢饉、疫病などの動乱の時代です。その中で、人間が亡き人にできることは追善供養しかできなかったのでしょうか。しかし、本当にそのことで亡き人を救うことができるのでしょうか。また、人間に人を救う力があるのでしょうか。むしろ自分自身さえ持て余しているのが私達なのではないでしょうか。聖人はそこに自分にまで届けられている念仏の意義を尋ね直していかれました。「信巻」の『経』に「聞」と言うは、衆生、仏願の生起・本末を聞いて疑心あることなし」の文章を安田先生は「大抵は衆生というものを忘れて読んでいる。衆生という自覚のところに聞というものがある」と言われます。私達はいつも自分を抜いて聖人の言葉

を答えとしています。続けて先生は、教えによって自らが「苦悩の有情」となるとき、私達の全身が本願を聞く耳になるのだと教えられます。「一切の有情は世々生々の父母兄弟」は聖人の口から出た言葉ですが、実は「苦悩の有情」たらしめられた聖人に聞こえてきた本願の声だったのでしょう。

浄土は「願心莊嚴」の世界だと言われます。今生は決して浄土になることはありませんが、「世々生々の父母兄弟」と願心を聞き、生きんとした時、煩惱具足の凡夫であり、それゆえ火宅無常の世界を造り続けていく、その身と世界そのままが願心を生きる場となっていくのです。生きる場をいただいてやっとな人は自分勝手な都合というものにしがみついていることを知り、仏にはなれないけど、愚者として助け合っていくのでしょう。

聖人は晩年のお手紙に「浄土にてかならずかならずまぢまらせそうろうべし」と言われます。それは決して別な世界に行きますということではなく、浄土に生まれる者となって下さい、同じ道を歩んで下さい、同じ仏の願いに生きて下さい、そこに私がいますと私達を促して下さいる言葉なのです。逆に言えば私達に先だつて亡くなった人のいのちが「順次生」の願いのいのちとして自分にかけていることに気付いているかという問いかけなのです。

「恵信尼消息」に聖人が風邪で寝込んでいた時、夢の中で「大経」の一字一字を残さず見ていたことに驚かれ「人の執心、自力の心は、よくよく思慮あるべし」と言われます。「父母兄弟」なるいのちが私に届いている。そこに生きんとしながら念仏を「わがちからにてはげむ善」にしていく自力の執心の深さに驚かれた。聖人は自力の念仏をしなかった人ではないと思います。自力の執心の深さに悩み、悲しむがゆえに「ただ自力をすてていそぎ浄土のさとりをひらけ」という促しをいよいよ聞かずにおれなかった人なのでしょう。

「有縁を度す」と言われます。亡き人も共に生きている人も総て私に本願を聞かせて下さる縁として見いだしていかれたのでしょう。「親鸞一人」のところに「一切の有情」の救いがかけられているのです。